●私のノートから●

# 片桐一男編『日蘭交流史　その人・物・情報』編集ノート

岩下哲典

このたび刊行された片桐一男編『日蘭交流史　その人・物・情報』（以下、本書）の編集をお手伝いしたので、この場をかりて、いささか綴ってみたい。

本書編者の片桐氏は、青山学院大学文学部史学科教授で、蘭学史、日蘭交流史を専門とされ、これまで思文閣出版より「蘭学、その江戸と北陸」や「阿蘭陀宿海老屋の研究」を、また、「阿蘭陀通詞の研究」や「杉田玄白」をはじめ多数の著作を上梓されている。

片桐氏の大学院ゼミ履修者・参加者が中心となって一九八三年に洋学史研究会（以下、同会）が結成され、以来、同会は一般に公開されて来た。会員の数も年々増加して今日、百六十名を数えるに至っている。原則として毎月第一土曜日に例会を、年一回の新春研究大会を開催し、機関誌「洋学史研究」を年一回コンスタントに刊行してきた。会長は、これまで片桐氏が務めてこられた。

本書は、同会の会員二五名が、日蘭交流四〇〇年と同会創立二〇年を記念して寄稿したもので、幸いにも日本学術振興会科学研究費補助金の研究成果公開促進費交付を得て、この度の刊行に至ったものである。刊行までの経緯は本書あとがきに詳しく書かせていただいた。また、収録論稿に関しても本誌に内容目次が掲載されているのでそちらを参照していただければと思う。

ここでは、本書の、一見かわり映えしない付録に関してぜひふれておきたい。付録とは「日蘭交流四〇〇年の軌跡」と題した年表と「日蘭交流史関連文献一覧」、英文要旨である。

年表では、従来知られている日蘭交流の歴史的事項をできるだけ収載した。それに加えて論文執筆者に本書収録論文で解明された新事実の数々を申告してもらい、それらを掲載した。これにより従来の年表とは一味違った、本書独自の、新鮮味ある年表になっている。ぜひ多くの方々に、この年表を活用していただきたいと思う。

文献一覧も、同会の会員に呼びかけ、会員の申告をもとに作成した。したがって日蘭交流史研究上のすべての文献を網羅している訳ではないが、同会会員がこの分野に如何に貢献しているかを知るうえでとても興味深いものになった。

年表は、日蘭交流四〇〇年にふさわしく、文献一覧は研究会創立二〇年にふさわしいものと思う。

英文要旨は、「序」および各論文ごとに作成した。これも執筆者本人作成のものを、日本史研究者でもあるネイティブ・アメリカンのチェックを受けて掲載した。外国人研究者にとって便利な道案内となったと思う。研究の国際化が進む今日、海外の研究者に対して情報発信することはすこぶる重要である。また、彼らから個別に史料の所在に関する問い合わせも増えてきているという。そこで、あまりなじみのない史料の名称に関しては原文をローマ字表記しながら、意味を補うといった工夫を施した。私としてはこうした点が、研究成果公開促進費の交付につながったものと思っている。

もちろん本体の各論文がもっとも大切で、論文がなければ、付録はおろか、本書さえも全く成立しなかったわけだが、付録も論文同様に、とても重要な意義と機能をもっていると思う。たかが付録、されど付録、なのである。ぜひとも、付録も味読いただければ幸いである。

最後に、本書は、複雑多岐にわたる日蘭交流史の諸相を、人・物・情報という従来の研究にない視点から総合的に分析したもので、それぞれの個別研究論文では未開拓である問題を新出史料をもとに実証的に解明している。それとともに付録にも本書独自のオリジナリティが認められる。思い起こせば、二〇〇〇年は、「日蘭交流四〇〇年」という記念すべき年であったが、本書のような研究書は、これまでのところ刊行されてはいない。したがって本書は、日蘭交流史研究上の最も重要な基本文献となることは間違いない。そして、オランダのみならず海外の日本研究者をも裨益することを確信してやまない。

いわした・てつのり　1962年長野県生まれ。1994年青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。2001年博士（歴史学）。1997年明海大学専任講師、2002年同大学経済学部助教授。著書「権力者と江戸のくすり」「江戸のナポレオン伝説」「幕末日本の情報活動」「江戸情報論」など。

# 日蘭交流史 その人・物・情報

片桐一男編


Ⅰ 人の交流と蘭学

通詞と奉行・カピタン　片桐一男
司馬江漢の西洋画観　磯崎康彦
井上春洋・その人と業績　佐光昭二
中津医学校と中津藩蘭学　川嶌眞人
清水卯三郎の長崎行を支えた人びと　高橋勇市

Ⅱ 書物と人

徳川吉宗と『和蘭問答』—オランダ商館長日誌を通して—　今村英明
『伊祇利須紀略』と近藤重蔵　木崎弘美
奥村喜三郎の『経緯儀用法図説』について　佐藤賢一
古書市場に漂流する洋学者の自筆史料—大槻玄沢、本木庄左衛門、本木昌造及びアーネスト・サトウの筆跡の特色—　八木正自

Ⅲ 欧文資料・画像資料

「日本に関する観察」——六六九年刊行の文献とその背景について—　ヴォルフガング・ミヒェル
シーボルト自筆「一八二六年江戸参府旅行の途上、クロノメーターによる緯度・経度の観測値」について　石山禎一
徳川茂栄の写真史料　藤田英昭

Ⅳ 近世の長崎貿易

一八世紀出島オランダ商館の「私貿易」について—委託経費と商館長買入銅—　八百啓介
近世中後期の長崎銅貿易と国内産業—古銅の問題を中心に—　若松正志
幕末期の日蘭貿易—嘉永六年(1853)の輸入品を事例として—　石田千尋
幕末開港以後、長崎における中国人の言伝荷物商法について　長田和之
長崎御勘定方の経済業務と長崎聞役—大田南畝「長崎表御用会計私記」から見た長崎奉行所と長崎聞役—　小山幸伸

Ⅴ 情報活動

レザノフ来航予告情報と長崎　松本英治
渡辺崋山のアジア認識と西洋認識　別所興一
再検討、オランダ軍艦の長崎入津と国王親書受領一件—新出史料「異国船一件」より—　岩下哲典
彦根・土浦両藩と阿蘭陀風説書　佐藤隆一
幕末の列強海軍情報とその実態—『阿蘭陀別段風説書』記載データを中心にして—　嶋村元宏

Ⅵ 洋学の近代

ジュール・ブリュネと大鳥圭介—箱館戦争史料「奥羽並蝦夷地出張始末」から—　片山　宏
「小説」の誕生と社会進化論　長沼秀明

付　録

年表　日蘭交流四〇〇年の軌跡　松本英治編
日蘭交流史関連文献一覧　石井　孝　編


《最新刊》


●A5判・588頁／本体 15,000円 ISBN4-7842-1125-X